

ライン・ウエストフアーレンの地方銀行の展開：  
ベルク・マルク銀行を中心に

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2011-08-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 居城, 弘 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.14945/00005822">https://doi.org/10.14945/00005822</a>

# ライン・ウエストフアーレンの地方銀行の展開

——ベルク・マルク銀行を中心に——

居 城 弘

(一)

いわゆるユニバーサルバンクシステムの原型が形成される歴史的基盤を探る場合、ドイツ型の銀行の特質が構造的に定着するに至る段階の銀行、したがってまた金融・信用制度の構造分析が不可欠な課題となろう。生成期のドイツ型銀行が、「証券銀行」、「企業銀行」あるいは「投機銀行」などの名で呼ばれるような、いわば産業企業の創業や証券の発行・売買などの業務に傾斜した特質を濃厚に持つものとして登場したのであるが、そのような性格はその後、一九世紀の七〇年代以降、世紀の転換期に至る過程で次第に変化して行き、いわゆる正規の銀行業務の基礎を強化・拡大することによって、銀行業務と証券・投資銀行業務を有機的に兼営するものとしての「ドイツ型銀行類型」<sup>1)</sup>が成立するのである。それはまた、産業構造においても、石炭、鉄、機械、金属などの重工業を基軸とし、それに電機、化学などの新興の産業の台頭をもふくめた構造高度化の過程でもあった。ここにおいて、生成期のドイツの銀行業がこうした産業構造の転換にいかに対応し、同時に自らの初期の特質を脱却し、「兼営銀行」として確立することになるかが問題の基本的な視角

である。

ここに、ドイツ資本主義の産業的中心地域であるライン・ウエストフアーレンの地方銀行に焦点を絞り、その展開の過程をたどることによって、この課題に接近しようと試みるのは、ほかならぬ地方銀行の現実的な展開そのもののうちに、問題解明のための重要な鍵が存在しているのではないかと考えられるからである。この地域の産業的な発展と地方銀行の関係がどのように進展していったか、そこにおいて銀行のかかわりかたがいかに展開して行くこととなったかを探りながら、課題への接近の手掛かりを得たいと思う。

## (二)

### (1) 「設立ブーム」と銀行業

一九世紀七〇年代初頭のドイツ資本主義は、六〇年代末からの経済的な上昇過程をうけての景気の拡大・活況、いわゆる「設立期ブーム」が現出した後、七三年の世界的な恐慌の発生によって転機を迎える。恐慌に先行する経済的ブームは、新投資の拡張による生産能力の拡張と国内市場の拡大が、フランスとの戦争の軍需資材に対する需要や戦中に抑えられた繰り延べ需要、さらには戦後の新しい政治状況のもとでの経済成長への期待などによっても加速されたのであった。

そしてまた、七〇年代初頭の「設立期」には、すでに五〇年代から六〇年代に設立された幾つかの株式銀行に加えて、新たに百余行にもぼる株式銀行が誕生することになったのである。すでに述べたように、六〇年代末からの世界的な好況と、ドイツ自体にとつての政治的なまた経済的な飛躍をもたらした諸条件のもとで、産業の諸領域にわたって新投

資の拡張と生産の急速な拡大が進行することとなった。このようなドイツ資本主義の急激な拡張は、株式会社制度をめぐる法的条件の改革（七〇年六月プロイセンの株式会社制度の認可主義から準則主義への移行）や、通貨・発券制度の改革などによっても支えられるところが大きかった。それまで、繰り返し行われて来た「会社設立」をもとめる動きに対して、プロイセン政策当局によって抑制的な対応が取られてきたのである。ここにおいて株式会社制度の改革は、経済的な自由主義的主張の影響が強まったことに促されて、これまでのような政府の抑制的干渉の放棄を意味するものであった。これによって、株式会社の設立を制約してきた法的な条件の改革によって、会社企業設立のブーム的な動きがもたらされることとなったのである。

この時期に設立された株式会社は、新規の創業よりも既存の企業の組織変更による拡張が多かったといわれるのであるが、その事情は銀行業の分野においても同様であった。五〇年代の「第一次創業期」につぐ七〇年代の「第二次創業期」に行われた銀行の創業の現実については、ほぼ以下のような状況であった。M. With によれば、一八七一―七三年に創業された株式銀行は一三〇行（株式資本金、およそ九億マルク）にのぼったが、このほかに八〇数行の「建築銀行（Baubanken）」（建築会社や不動産会社の創業を専門に行うものであった）の創業が行われた。<sup>(4)</sup> このように短期間に集中して創業された銀行の中には、後にベルリン大銀行に成長する、ドイツ銀行、コメルツ銀行、ドレスナー銀行のほかに、各地の産業との緊密な結び付きを、七・八〇年代の推移の中で形成することになる多数の地方銀行、例えばライン・ウエストフアーレンの有力地方銀行に発展するエッセン信用銀行やベルク・マルク銀行なども含まれていた。また、地方銀行としては、この「設立期」に先行して六〇年代の後半には、バルマー銀行連合など幾つかの地方的に重要な銀行の創業が行われたが、当時の会社法の条件の下で、政府の設立認可を回避する形態として株式合資会社の形式が取られた。また南ドイツでは、既に六〇年代の末に会社創業の動きが活発化し、銀行業の領域においては、ヴュルテンベルグフェ

ライン銀行などの有力四行の設立がおこなわれた。

これらの銀行を含めて、七〇年代の初頭にはその後のドイツの銀行制度の構造の中で、重要な位置を占めることとなるものが集中して誕生したのであるが、他方では、創業ブームのなかで、投機的な証券取引を主たる業務としていた「泡沫的な Eintagsfliegen 銀行」や、地方取引所所在地での証券仲買業者 Maklerbanken もかなりの数にのぼったとされる。

## (2) 「設立ブーム」の崩壊と「創業恐慌 Gründerskrise」

この設立ブームのなかで、石炭、鉄工業を初めとする一連の産業諸分野において、株式会社への組織変更がおこなわれたが、さらには電気や化学工業などの産業においても、新企業の誕生を見ることになった。こうして広範囲にわたる産業の諸分野において、設備投資が集中して行われ、したがって生産・供給能力の飛躍的膨張をもたらすこととなった。しかしこのブームの終幕を告げる、七三年四月、オーストリーのウィーン取引所の崩壊はドイツに波及する。ベルリン取引所の株式相場暴落に始まり、商業の分野で過剰な在庫を抱える諸企業の支払い不能、さらには生産の領域にまで及んで、全般的な過剰生産の顕在化と販売困難が広がった。その影響は不可避免的に銀行業の領域にまで及ぶこととなった。銀行による貸付けが固定化し、回収不能が続出したり、証券投機の失敗から巨額の損失を免れず、倒産に追い込まれる銀行が続出した。

その結果、ブーム時に全国各地の都市に設立された諸銀行のうち、ベルリン、ドレスデン、ハンブルグ、フランクフルトといった主要都市だけで、あわせて六〇行もの銀行が清算に追い込まれたとされる（全体の四〇％に当たる七二行が清算された）。

これらの銀行の多くは、株式発行プレミアムの獲得を目的として、株式会社の投機的な創業をつうじて投機を加速し

たのであって、こうした株式会社制度の濫用の帰結は当然、これにかかわった「投機銀行」の崩壊をもたらさずにはおかなかった。しかも、主要な業務が創業業務に向けられ、正則業務をほとんど営まないものも多かった。あるいはまた取引所業務以外のことを行わない「仲買人銀行」であるとか、実態は純粹の建築会社と異ならない「建築銀行」などが証券の投機的利得のために、設立ブームの熱狂の渦の中で次々と生まれたのであった。さらに重要なことは、後に大銀行や地方の有力銀行に成長する銀行の多くも、こうした投機的な「銀行」の設立に深くかかわったことである。ブームの崩壊と証券相場の暴落は、大量のほとんど無価値同然の売れ残り証券を抱えたこれらの銀行に、破滅的な結果をもたらしたのであった。<sup>(5)</sup>

投機的な証券業務に深くかかわって、業務の停止と支払い不能・倒産に追い込まれた銀行は、銀行清算によって消滅するか、あるいは他の有力銀行へと合併されることにより、事実上、銀行の集中過程が進行することになった。有力銀行による「投機的・起業・発起銀行」の清算・合併、事実上の集中は、次のような意味をもつものとして、有力銀行による清算の遂行への大きな契機となったのである。第一には、清算銀行の暴落した株式と合併銀行の株式との交換によって、帳簿上の合併プレミアムを獲得する可能性を与えたことである。第二に、これによって清算される銀行の取引顧客との営業関係を受け継ぐことが可能となり、今後の業務の拡張の基礎とすることができたことである。第三には、清算される銀行の資産・負債を受け継ぐことにより、保有手形・証券、不動産、抵当証券などを取得するだけでなく、一定の期間をかけて清算が遂行されることから、その経過の中で、不良債権の処理や取引関係の整理を行うことによって、業務の基盤強化がはかられたのである。ここにおいて、銀行清算の遂行の積極的な担い手として登場するのが、ドイチェバンクやドレスナー銀行、ライン信用銀行さらにドイツウニオン銀行等の有力諸銀行であった。同様なことは、地方の有力銀行の場合にも見られたのであった。

のように、七〇年代初めの設立ブームとその崩壊は、新たな銀行の誕生をもたらしたとともに、多数の泡沫的、投機的な「銀行群」の倒産とその清算による整理の過程を通じて、実質的な銀行集中の作用をもたらし、その後の銀行業の展開のための基盤をもたらすこととなったのである。

### (3) 七〇・八〇年代の銀行業の展開

株式会社銀行は「設立ブーム」の中で、創業・証券業務に深くかわかることによって、大きな損失を免れなかったことから、こうした業務から後退し、より慎重な姿勢を取らざるを得なくなった。

恐慌後の整理過程では既にみたように、破産した諸銀行の集中、それによる合併差益の獲得と顧客の確保や、減資などを通じてその後の展開の基礎を築いたのである。<sup>6)</sup> 整理過程での業務の中心はしたがって、株式業務などに代わって交互計算やその他の貸し付けが業務の中心にならざるを得なかった。そのために、取引の対象として産業の優良顧客の獲得をめぐる激しい競争が行われたのであったが、恐慌の後に持続した不況期のもとでは、しばしば新規の顧客の開拓は困難に直面せざるを得なかった。そこから、銀行にとっては、資金の有利な運用・投資先の確保が大きな問題となったのである。このように、不況過程の進行の中で、銀行の新たな活動領域の開拓と同時に、銀行の業態自体の在り方についても、証券・投機銀行的な性格からの脱皮が迫られたのであるが、この後者の課題は産業企業との交互計算取引の関係を基軸とした、恒常的な銀行業務の育成強化を通してこそ可能になるものである。けれども、不況の長期化のもとで、この課題の達成は容易には果たされなかった。

ここにおいて、事態の進展とともに、金融市場の中心としての地位を確立した首都ベルリンに活動の拠点を置くベルリンの大銀行と地方の諸銀行との間には、業務の態様の相違が顕著に現れるようになったのである。それは具体的には、

金融市場の中心に基盤をおいたベルリン大銀行の場合、鉄道の国有化に伴う公債発行や地方債、外国証券および土地抵当証券の引き受け発行などの証券業務を積極的に展開し得たのにたいし、地方の諸銀行の場合にはそのような業務に参加する道が極めて限られたものであったことから、地方の産業の取引顧客との間で、交互計算取引などの、正則的業務に活動の重点がおかれることとなったからである。こうした、ベルリン大銀行と地方諸銀行との業態構造の分化傾向は、八〇年代に入って、産業構造の高度化の進展、鉄鋼業を初めとする重工業の諸分野での、新生産方法の採用に伴う新たな資本需要の増大、さらには産業の集中運動の進展とともに、当然、変化せざるを得なくなってくる。ベルリンの大銀行は産業との結び付きを求めて地方への進出をめざすこととなり、その結果、優良産業顧客の獲得をめぐる地方銀行との競争を激しく展開せざるをえなくなった。他方、地方の諸銀行は取引先顧客の増大する信用需要にたいして、自らの資金的基礎の強化という課題に直面し、さらには交互計算信用による貸付の回収、その流動化を求めて、証券の発行の可能性を追求・模索せざるをえなくなったのである。

こうした銀行をめぐる新たな展開は、《銀行集中》の運動を通じて、具体的にはベルリン大銀行による地方銀行の集中という形態において進展するのであり、七・八〇年代に現れた大銀行と地方銀行との分化傾向は、銀行集中を通じて統一化がはかられ、こうして、「ドイツ型銀行類型」たる兼営銀行制の確立がなされるのである。<sup>(7)</sup>

このように見て行くと、地方銀行の展開を検討することは、ドイツの銀行制度の歴史的な構造変化の、言わば、基盤的な土壌を説明することにつながるものである、ということができないのではないか。つまり、銀行史の分析において、その下部の構造のところから積み上げて行くことが必要なのである。



## (三) ライン・ウエストフアーレンの地方銀行の展開

地方銀行と言う場合、そこで問題となるのは、活動領域や店舗網の展開が地域的あるいは地方的な銀行ということであるが、当然のこととして、個々の地方銀行によつてその性格や活動の点で、それぞれ大きな差異があるのが当然である。そのような特徴を与えているものとしては、活動の基盤となつてゐるそれぞれの地域の産業のあり方によるところが大きいのである。とりわけドイツのように、それぞれの地方的な独自性の濃厚な国の場合には、地域的な偏差が極めて大きいことが指摘されよう。しかしここで、ラインウエストフアーレンの地方銀行を取り上げるのは、そこがドイツの産業的中心をなすものであつたこと、さらにこの地域の銀行業の展開は、歴史的にも先進的であつただけでなく、その後の経済的展開の過程において、ドイツの銀行・信用制度の基礎的な構成部分をなすものであつたからにほかならない。<sup>(8)</sup>ここでの分析を基軸にして、さらに南ドイツやシュレジエン地方、さらには、国際的な活動の領域ではハンブルクについてというように、それぞれ個性的な地方銀行業の展開が考察されるべきであらうと思う。したがつて、そのような作業の第一段階という位置づけである。

そこでまず、地方銀行の七〇年代の展開について具体的に見て行くことにする。その場合、主として次の点に留意しながら、考察を進めたい。つまり(1)地方諸銀行の産業関係が七〇～八〇年代にどのように推移していき、(2)そこにおいて、銀行業務の展開に即して、具体的にいかなる業態における特質を示したか、とりわけ、産業との恒常的な取引関係の核をなす交互計算業務のありかたに着目したいと思う。(3)そのうえで、地方銀行の業務の展開のうちに生ずることになつたさまざまな問題と、その解決のためにどのような模索が行われ、結局のところ、最終的にベルリン金融市場

に基礎をおいたベルリン大銀行との連携・依存という方向が目指されることとなった事態の背景・事情を考えてみたい。そのさいに対象として取り上げる銀行は、産業的中心であるラインウエストファーレン工業地域を活動領域とした諸銀行のなかから、ベルク・マルク銀行を取り上げることにした。ベルク・マルク銀行は後論するように、エッセン信用銀行とならぶ地方銀行の双璧をなすものであつて、しかも、エッセン信用銀行が初めから重工業のための銀行として活動を展開したのに対して、ベルク・マルク銀行は、そもそものは繊維産業の中心地・エルバーフェルトを基盤としていたのであるが、その後、地域的拡張によつて、ライン・ウエストファーレンの全域に活動基盤を広げたこと、産業との関係においても、繊維産業から出発し、さらに各地の重工業へとその取引の領域・分野を高度化し多様化して行つたことに見られるように、極めて興味ある、重要な対象をなすものと考えられるからである。

# (1) ベルク・マルク銀行 (Die Bergisch Märkische Bank, Elberfeld)<sup>(6)</sup> の生成・創業

一九世紀の末にはドイツにおける最大の地方銀行の一つにまで発展を遂げるベルク・マルク銀行の成立は、普仏戦後の政治的、経済的な高揚の中で訪れた「企業設立ブーム」の時期に当たり、豊かな工業的發展地域であるベルクマルク地方の主要中心地であるエルバーフェルトの諸産業、商工業者の、新しい銀行設立を求める要望に支えられて、一八七一年一月に、行われた。この地域の商工業者の増大する資本需要と、信用取引の発達・促進への要請を、ここにおいて新たな信用機構の創出によつて充足することは、一層の経済的發展にとつて大きな意義を持つものと考えられたのである。一八七一年一月八日、ブッパータールの多数の著名な商工業者が、ベルク・マルク銀行の創業のための総会に集まつた。その中心人物は、エルバーフェルトのG. ゲブハルト Gebhardであつた。この創業にはベルリンのデイスコント・ゲゼルシャフトや、その系列の地方デイスコントゲゼルシャフト、バルマー銀行連合も参加した。

作成された定款によれば、株式資本は四五〇万ターレルとされ、一株二〇〇ターレルの株式に分割され、さらに八〇〇万ターレルまで資本金を増加する権限が管理委員会 Verwaltungsrath に与えられた。この株式は全額が創業者によって引き受けられたが、当初払い込みは四〇％であった。創業者たちが目指したこの銀行の主要課題は、《堅実な交互計算業務を育成すること》であったが、この銀行のその後の展開の中でも、この点は銀行業務の拡張に際してもつらぬかれていたと言いうる。定款の第二項では、銀行が行う業務内容が示されている。それによれば、あらゆる分野の業務を営むが、とりわけ以下の八つの領域について注意が向けられるとしている。つまり、(1)ドイツの各市場宛の手形の割引、(2)外国諸市場宛の手形の売買、(3)貨幣両替・取り立て業務(4)各種証券の委託注文の方法による売買、(5)預金の受け入れ、(6)当座勘定の開設（信用授与つきであるいは、信用授与なしで）(7)各種公債、地方債や民間会社社債の単独又は他の諸銀行と共同での引き受け、(8)大西洋の向こう側の、南北アメリカ大陸の諸市場との、通商・銀行（金融）取引関係の推進、がそれである。<sup>(10)</sup>

ここからわかることは、この銀行が交互計算取引の拡大を主要課題とし、その基礎のうえに公債や社債の引き受け、証券の委託売買業務を展開することを目指してスタートしたことである。このことはブッパータールやエルバーフェルトが、ラインの繊維工業地域の中心として、一八世紀後半以降の農村工業の展開に基づいて、綿、絹、毛、麻織物等の各種の繊維工業の生産製造とその各地域間の交易の拠点をなすものであったこと、加えて、外国諸市場に向けての輸出貿易の展開を示していたという、その産業的な基盤の性格によるのである。

定款では創業活動や、株式の引き受け発行などの業務分野についてはのべられていないが、しかしそれらが、明示的に排除されていた訳ではなく、後に見るように各種の銀行商会の組織変更や、一般産業企業の創業にも単独で、あるいは共同でかわることが多かったのである。それにしても当初から、銀行業務の力点が、交互計算業務におかれていた

ことは明らかである。そして活動開始と同時に、エルバーフェルトの古い銀行商会(A. de Weerth)、を引き受け、この銀行商会が築いて来た諸産業との取引関係を受け継ぐことによって、確実な交互計算業務のための基礎を獲得することが出来た。同様の目的から、当時経営不振にあったデュッセルドルフ銀行のエルバーフェルト支店を引き受けたが、これはベルク・マルク銀行が、のちにラインの大企業との関係を築くうえでの基礎をなすものであった。

## (2) 設立ブームと恐慌の影響

七〇年代初頭の好況は、この銀行の創業直後からの業務の順調な拡大を促進するものであった。その中心をなしたのは、この銀行が創業に当たって掲げた交互計算業務や手形業務などであった。さらに、業務の基盤を拡大する目的で行われた他の銀行への資本参加や、証券の委託売買業務についても、デイスコントゲゼルシャフトの子会社との結び付きによって、ベルリン金融市場との関係を利用しながら、その分野の拡張が実現した。順調なスタート振りはその収益状況にも現れており、それをうけて、七二年七月には株式資本の残りの払い込みが行われた。

七三年の恐慌の勃発は、この銀行にも深刻な影響を及ぼした。とくに取引先企業の中で、恐慌のなかで支払い不能に陥るものがあって、それら企業への貸し付けが、回収困難になったために、銀行にとつての損失の発生をもたらしたからであった。このため、損失の補填と不良債権の償却のために、利益の一部を割かざるを得なくなったほかに、積立金の取り崩しを余儀なくされることになった。さらに、証券保有勘定でも七三年からの相場の崩落の影響で、かなりの損失が発生した。全般的な経済的な沈滞は、過剰生産の結果であった価格の低落や、事業活動の不振の状態を長期化させることとなった。銀行の資産の縮小に対応するために、減資が行われなければならなかった。

景気のある程度の改善が見られるようになるのは七〇年代の末であって、七〇年代の後半は銀行にとつても全般的な

表一(1) ベルクマルク銀行の支店網の拡大

年	支店(預金取扱所)所在地	個人銀行の清算の引受による	小規模銀行の引受・吸収による	純然たる支店の 新設立による
1874	Düsseldorf	—	Fil. Elberfeld-Wechsl. und Disk Bank	—
1909	"	—	Niederrheinische Bank	—
1888	Aachen	Schweizer & Co.	—	—
1901	"	Suerrnondt & Co.	—	—
1889	M. Gladbach	J. Wm Quack	—	—
1893	Köln	—	—	Köln
1895	Elberfeld (Ruhort)	J. H. Brink & Co. Salomon Philip	—	—
1896	Hagen	—	—	Hagen
1897	(Duisburg)	—	—	Duisburg
1898	Remscheid	—	Remscheider Bank	—
	Bonn	—	—	Bonn
1901	"	Goldschmidt & Co.	—	—
1900	Krefeld	A. & C. Sohmann	—	—
1904	"	A. Molenaar & Co.	—	—
1902	"	v. Beckerath & Heilmann	—	—
1903	Bocholt	—	—	Bocholt
1902	Barmen	—	Barmer Handelsbank	—
1904	Trier	—	Trierer Bank	—
	Paderborn	—	Padersteinscher Bankverein	—
	Warburg Dep.	—	—	Warburg
	St. Johann Saarbrücken	Lazard, Bruch & Co.	—	—
1905	Koblenz	—	—	Koblenz
	Rheydt Dep.	—	—	Rheydt
	Hilden Dep.	—	—	Hilden
1906	Goch "	—	—	Goch
	Schwelm "	—	—	Schwelm
	Cronenberg "	—	—	Cronenberg
	Wehrhahn "	—	—	Wehrhahn
1907	Neuenahr "	—	—	Neuenahr
	Bernkastel "	—	—	Bernkastel
1909	"	—	Bernkastler Volksbank	—
1908	Solingen	Hüser & Co.	—	—
1909	Lippstadt Dep.	—	—	Lippstadt
	Neuß "	—	—	Neuß
	Mörs "	—	—	Mörs
	Ronsdorf "	—	—	Ronsdorf
1910	"	—	Kredit und Sparbank Ronsdorf	—
	Hamm	Max Gerson & Co.	—	—
	Soest Dep.	"	—	—
	Wald "	—	—	Wald
1911	Mülheim a. Rhein	—	Mülheimer Handelsbank	—
	Opladen Dep.	—	—	—
	Schlebusch "	—	—	—
	Haspe "	—	—	Haspe

法経研究四四卷一号(一九九五年)

一四四

出所：F. W. Klinker, Studien zur Entwicklung und Typenbildung von vier  
Rheinisch-Westfälischen Provinzaktienbanken, Karlsruhe, 1913, S. 26

景気の低迷から、流入する資金の有利な投資先を求めることが難しく、資金の運用難に直面したのである。

経済循環の転換点は七九年の初めから現れた。経済政策と関税政策の根本的な変化もこの転換の一契機となった。ベルク・マルク銀行は、その顧客層の拡大に精力的に取り組むことによって、ここに新たな展開の画期を迎える。同行の拡張の方向は、顧客との単なる取引数の増加だけではなく、一つには地域的な拡張によって、それまでのエルバーフェルトやブッパータールなど、ベルク・マルク地方だけではなく、それを越えてラインウエストファーレン地方全域にまで広げようというものであった。繊維産業が国際的な競争条件の悪化によって、停滞を余儀なくされたという背景のほかに、ラインのその他の地域での石炭、鉄などの重工業がより大きな発展の可能性を与えるものであったからである。

銀行の活動基盤が地域的に拡がっていけば、それによって当然、顧客層の属する産業分野の多様化と拡大が生じることになる。ベルク・マルク銀行の取引顧客層は、繊維産業から鉄工業や機械製造などの新しい産業分野へと広がって行くこととなった。一九世紀八〇年代にこの銀行がこうした地域的な、また産業のさまざまな分野への拡張を進めるに際して取った方法が、『地方的規模での銀行集中』であった。

その点において、ベルク・マルク銀行の進めた、積極的な支店の拡張政策は、地方銀行のこの段階の在り方としては、特に注目に値するものといえる。また、株式資本の増資も、支店の拡張、それに伴う顧客層の拡大、顧客の信用請求の規模の増大に対応するために、数度にわたって行われる必要があった。

また、八〇年代の不況期には銀行の内部的な財務構成の立て直しにも力が注がれた。それにかんしては、八五年から八八年にかけて四年間で併せて一一四万マルクにのぼる、集中的な不良資産の償却、不良貸し付けの整理が行われた。この措置は、銀行のその後の拡張のための基礎となったのである。

銀行の取引先が地域的に拡張し、それにともなう信用需要の増加とともに、顧客との支払取引や交互計算取引など、

多種多様な取引が拡がって行くことになった。そしてここから、恒常的な業務の取引を円滑にし、顧客の営業の状態を直接・日常的に観察するためにも、支店の設置による支店網の拡大が求められるようになった。

(3) 支店の拡張政策の展開

ベルク・マルク銀行の支店拡張の展開は次のように進められた。

- 一) まず、一八八五年バルメンに *Schmerzchild, Fischer & Co.* を設立し、これに合資参与（五五万マルク）を行った。これを通じバルマーの一流企業との取引関係の創出が可能になった。
- 二) 一八八八年アーヘン *Aachen* の銀行商会 *Schweizer & Co.* を引き受け、支店に組織変更。
- 三) 一八八九年 *München-Gradbach* の支店設置（銀行商会 *J. Wm. Quack* の引き受け）
- 四) 一八八九年 *Schwehn* の銀行商会の清算を引き受けることによって、ウエストファーレン地方の銀行取引先の一層の拡張が可能になった。
- 五) 九三年 *Köln* 支店の設置。
- 六) 九六年 *J. H. Brink & Co.*（これは、一〇〇年以上前からエルバーフェルトで活動してきた老舗の銀行商会であるが、バルメンやエルバーフェルトの繊維産業に対する白地信用の供与によって、影響力をもっていた）を引き受け、管理委員会メンバーに迎えられた。
- 七) 同年、ルールオルトの *Solomon Philip* 銀行商会の引き受けを行った。
- 八) 九六年、ハーゲン支店の開設。これは大きな工業地域における収益の可能性を約束するものであった。

## 《ベルク・マルク銀行の拡張と展開の基本線》

これまでに見たことから明らかとなる、ベルク・マルク銀行の拡張政策の展開の基本的な内容は、以下のようにまとめることができるであろう。

第一として、本来の銀行の中心課題は産業の取引顧客との交互計算業務の育成と拡大をはかることであり、それを基軸として、正規の銀行業務、手形、預金業務の基盤を強化することであった。そのために、第二として、産業の取引顧客の拡大と多様化を進めるために、支店網の地域的な拡張を目指したのであった。具体的には、各地の個人銀行商会への合資参与や引き受け（持分権の引き受けによる、事実上の合併形式）によって、これを支店化した事が挙げられる。ついで第三には、このような地域的・地方的銀行集中によって、これら個人銀行商会が永年にわたって形成してきた、各地の産業の取引顧客との関係を受け継ぐ（継承）ことが可能となり、これを通じて交互計算関係の拡大と正規の銀行業務の基盤の強化をはかるというものであった。第四には、このような銀行集中を実施するための資金的基礎を強化するため、数次にわたって株式式資本の拡大・増資が行われた。九六年にはこれによって同行の総株式資本は三〇百万マルクに達した。この結果、ベルク・マルク銀行は、ドイツ最大の地方銀行の一つに発展することになった。

さらに、このような展開の基本線の延長上に、取引先顧客の求める信用需要が拡大することにより、次第に地方銀行としての資金的な限界に直面するという問題が生じることになった。そのような貸付の回収のためには、証券の引き受け発行業務の展開によって、流動化をはかることが不可欠のこととなる《地方銀行のユニバーサルバンク化の契機》。その場合、地方的な規模での証券の発行や売り出しの方法、具体的には銀行の支店網を通じて、その周辺の地域的な投資家層に販売するという方法は、増大する銀行貸付の流動化・回収をはかるものとしては早晚、限界に直面することになるのは明らかなことであった。ここに、地方銀行の業務の展開にとつての限界が顕在化する。この解決のためには、ベ



ルリン金融市場を基盤とする大銀行との連携をもとめ、証券発行の積極的拡大をはかることが不可避となったのである。

一八九七年、ベルク・マルク銀行とドイチェバンクとの間で、利益共同体 Interessengemeinschaft の関係が形成されることになった。このことによつて、ベルク・マルク銀行の発展は全く新しい段階に進んでいくことになる。ここでのベルク・マルク銀行のねらいは、後にも触れるところであるが、ドイチェバンクとの連携関係を結ぶことによつて、まず第一には貿易金融取引などの国際業務の積極化、次いで第二に大銀行の融資プロジェクトへの参加の可能性であり、第三に、重工業の資本需要の大規模化の結果、地方銀行の資金力では対応の限界に直面していることから、ベルリンでの証券発行業務の拡大の可能性を基礎にして、交互計算取引のより高度な展開を可能にすることであつた。これによつて、ベルリン大銀行の強力な後ろ盾に支えられて、ベルク・マルク銀行は今度はドイチェバンク・コンツェルンのグループの一員として、それまでの段階とは異なり、一段と飛躍的な拡大が可能となったのである。

表一(2) ベルクマルク銀行の監査役構成 (人)

年	監査役総数	地 域 別		企 業 分 野		
		バルメン、エル パーフェルト	それ以外 の 地 域	株式会社	個 別 企 業 (非株式会社)	銀行支配人、 レントナーなど
1885	11	8	3	—	10	1
1886	10	7	3	—	9	1
1887	11	8	3	—	10	1
1888	10	7	3	—	10	—
1889	10	7	3	—	10	—
1890	11	7	4	—	11	—
1891	10	6	4	—	10	—
1892	9	5	4	—	9	—
1893	9	4	5	—	9	—
1894	10	6	4	—	10	—
1895	9	6	3	—	9	—
1896	12	7	5	—	10	2

また、ドイチュエバンクとの連携の後にも、ベルク・マルク銀行の支店拡張はさらに大きく展開されていた。ベルク・マルク銀行による、新たな支店の拡張の特徴について、クリンカー(Klinker)は、極めて長期的な見通しのもとに計画的かつ組織的に進められている点を指摘している。この銀行の主要な課題とされた交互計算業務の堅実な育成と拡張のために、優良な顧客との取引関係を形成していた個人銀行商会に対する合資参与から始まって、それらを支店に転換、組織変更することによって、個人銀行の業務を引き受けることに進み、こうして正規の銀行業務の発展を基礎とした産業企業との緊密な関係が形成されて行ったということである。さらにまた、ドイチュエバンクのコンツェルンの傘下に入ることになってからは、これに加えて同じコンツェルン内部の友好的な諸銀行の支店所在地での、支店の重複関係の調整と、相互の営業領域の境界についての調整が課題となったというのである。このような組織的計画的な拡張のために、株式資本の計画的な増資が行われたのであった。

#### 四 ベルク・マルク銀行の業態構造について

以上のところで、ベルク・マルク銀行の発展の跡をたどって来たのであるが、それを受けて次に、そのような発展の中で、同行の銀行業務の内的な発展、いわば、業態構造の変化がどのように進んだのかを見ることにしよう。そのさいのポイントは、初期のドイツの株式信用銀行に共通した、証券銀行的な性格からの脱皮がいかに進んだか、また、業務全体の基軸的な位置を占める交互計算取引の重視が、どのように展開されていたかである。また、手形業務や引き受け信用の展開の現実についても、預金業務のありかたも含めて考察したい。最終的には、地方銀行にとつての証券業務の展開の可能性と制約が、同行の業態構造にとつてどのような意義をもったのかについて考えてみたい。

(1) 交互計算業務

一八七二〜八五年までの時期について。ベルク・マルク銀行の創業当初からの業務の主要課題が交互計算取引の育成にあったことは既に述べたが、注目されるのは、創業当初から極めて積極的に、その顧客層の拡大を追求したことであろう。地域的にも、当初はエルバーフェルトやバルメンの商工業者に多くの顧客をもちながら、その外部のラインウエストフアーレンの全体に取引先を求めて拡大した。このための重要な手段として、各地の個人銀行に対する合資参与や、持ち分権の引き受けによる事実上の合併などの方法によって、個人銀行商会の取引関係を受け継ぐという形態で進められた。この結果、ベルク・マルク銀行は早くから地域的な銀行集中を展開したのであった。営業報告書でも強調されているように、この銀行の業務・活動の重点は商工業者との純然たる交互計算業務にあって、しかもその取引顧

表一(3) ベルクマルク銀行の発展（バランスシート主要項目）（1,000マルク）

年 (年末)	現金・ 預金・ 当座	手形 (うち 外貨)	交互計 算貸付	対銀行 家貸付	証券保有	株式資本	準備金	交互計 算預金	一般預金	引受	バラン スシ ー ト 総額
1887	1,332	13,521 (2,488)	31,909	2,136	189	15,000	1,669	12,713	3,278	15,126	49,997
1888	1,351	13,619 (2,975)	33,620	3,113	868	15,000	1,697	12,330	3,322	15,357	53,392
1889	1,609	13,081 (2,007)	25,409	11,295	1,576	20,000	2,200	13,887	5,607	10,574	56,050
1890	1,843	15,934 (3,355)	25,181	11,502	1,235	20,000	2,246	14,605	7,570	10,236	58,300
1891	1,556	17,473 (2,617)	23,701	12,320	1,388	20,000	2,294	14,988	6,861	11,175	59,268
1892	1,744	16,266 (2,050)	21,674	14,302	1,297	20,000	2,339	14,926	6,701	10,173	58,331
1893	1,436	15,708 (2,430)	25,060	13,270	1,883	20,000	2,381	15,894	6,161	11,653	60,137
1894	2,040	17,011 (1,701)	23,306	19,838	1,871	20,000	2,427	22,295	7,222	10,672	66,951
1895	2,233	17,414 (2,521)	32,988	19,076	4,165	25,000	4,047	24,243	8,960	11,778	79,449
1896	2,175	16,930 (2,182)	39,517	23,703	4,403	30,000	5,271	23,669	11,878	13,434	91,090
1897	2,896	25,249 (2,777)	43,679	34,115	6,800	40,000	8,676	25,741	16,068	18,456	11,318

出所：Geschäft-Bericht der Bergisch Märkischen Bank

客が多種多様な産業分野に広がっていることが特徴である。銀行業務の展開が、特定の分野に偏することを回避し、それにより収益やリスクにとつてのバランスを保証するものとして、取り組まれた結果であつた。

産業に対する信用授与は、一般には、交互計算取引を通じて、交互計算信用（貸付）、つまり帳簿信用による貸付として行われ、小切手取引の未発達なドイツでは、顧客はそこから貨幣を引き出すというやりかたで利用したり、振替取引と結び付けて用いられた。この銀行の初期の顧客構成からして、顧客の属する産業部門中で最も多かったのは、繊維産業などの製造業と商事会社に対するものであつて、そのような顧客に対する貸し付けが主たる部分をなしたものである。

さらに、八五〇九六年の時期になると、交互計算貸付 *Debitoren* が資産構成の中で最大部分を占めるという状況は変らないが、表1(3)によれば、総資産に対する交互計算貸付の比率は八七〇八八年には六割を越えていたが、八九年には急減して表されている。しかしこれは恐らく、証券担保での銀行家に対する貸付（ロンバード、ルポール）が別の項目に記載されるようになったからであらう。一貫していることは、交互計算預金にたいしてそれを大きく超える貸し付けが行われていることであつて、このことは、預金の種類やそれらの性格とも関連することであるが、いずれにせよ、この銀行の展開した地域的な銀行集中の結果、顧客層の変化とともに、その信用需要の性格にも一定の変化が生じて来たことを示すものであつた。つまりそこにおいて、新たな顧客層からの資金需要の量的な拡大とともに、質的にも、固定設備に対する貸付が次第に増えて行つたことが窺えるのである。これはまた、引き受け信用の問題とも関連し、同行が信用供与のうえで新たな内容の問題を抱えることになったと考えることができる。

## (2) 引受信用

手形にたいして支払いの引き受けを与える、という形態での銀行の信用供与は、ドイツにおいては貿易手形にたいしてだけではなく、国内商・工業に対しても行われ、金融市場にたいしてもさまざまな影響をもたらすこととなった。ラインウエストフアーレンの銀行においても、引き受け信用、引き受け手形はその業務の中で重要な部分を占めたのである。この点については、既に何度か指摘してきたところである。ペルク・マルク銀行においてはこの点はどうであったか。同行の引受勘定は、貨幣市場での緩慢化が広がった八三年から、増加の傾向を示すようになった。その理由は、顧客の側では、以前までの貨幣貸付に変わって銀行の引き受け手形を利用すれば、貨幣市場での低い手形割引利率で資金調達が可能になるからである。これは、銀行の信用授与の在り方として問題があるだけでなく、銀行にとっては貸付の利子の低下を意味することになるが、顧客を巡る競争上、銀行としても顧客の希望に応じて行かざるを得ないという事情にあつたとされる。

引き受け信用がここにおいてどのような位置を占めるかについて考えて見よう。クリンカーによれば引き受け信用の動きは、絶対額で見て行くと九〇年代になってかなり大きく減少しているのであるが、銀行運用資金の総体（負債、資本、準備金）の中での比重について見ると、八〇年代の末つまり八七～八八年ころまでは、全体の三割前後を占め、引き受け債務による銀行の信用授与の重要性が極めて大きかったことが示されている。<sup>11</sup>しかしこの形態での信用供与には、顧客の支払いの停滞や停止といった事態が発生した場合に、銀行に深刻な影響が及ぶことから、特に事実上、長期の貸し付けの手段とされる場合について、しばしばその乱用の弊害の重大さについて、問題視されてきたのであった。ペルク・マルク銀行の場合には、引き受け信用について、とくにその国内信用業務において事実上、長期化する手形にたいする引き受けは、健全な国内信用業務にとって好ましくない影響をもたらしかねないという見地から、これを抑制すべ

きであるとして、とくに九三〇九六年（九五、六年に顯著となつてゐる）にはかなりの削減が行われた。しかし逆に言うと、そのような危惧の念をもたざるを得ない程度に、これが広範に利用されていたことを示しているのである。一八九三年の「營業報告書」は以下のように述べている。「外国との商品取引の決済を、国内の受取人（輸出者）の計算で、船積書類（ドキュメント）と引き換えに銀行宛に手形を振り出すことは、明らかに最も簡単な形態である。これに対して、国内企業が授与された信用を、現金で利用する代わりに、銀行宛の長期の手形の振出で利用することは、なるほど一時的には、利用する国内企業にとっては低利の市中割引手形を利用することができるといふメリットがもたらされる。また、銀行にとつては、現金の補完を引受債務を増やすことで行うことができるということになるが、しかしそのような方法は、我々にとつては当然のこととは思えない。」<sup>(12)</sup>

実際に、顧客の側での支払い不能によつて、交互計算貸し付けの回収が困難になるといふケースが、八五〇八八年にはしばしば発生し、そのための処理策としてかなりの償却の実施を迫られたのである。これがすべて引き受け信用と関連するものであったとは言えないものの、そのような危険と深くかわる可能性をもつた信用供与が行われた事も事実であつた。この点は後の段階にも再び問題とされるのである。

### (3) 手形業務

顧客との取引で手形業務はかなり高い比重を占めた。とりわけブツパートナーの輸出産業としての繊維産業との、輸出貿易に伴う外貨建手形、外国為替手形の取引とそれにもなつて為替の裁定取引の必要性が比重を高めた理由であつた。繊維産業の輸出活動と結び付いて、当初の段階での手形業務では、輸出・外貨手形が、ターラー・内国手形の取引を上回る状態であつたが、七〇年代の進行の中で、七四年以降には外国為替勘定のウエイトの低下とそれに代わつて内

国手形の上昇が現れた。これは幾つかの原因によるのであって、(一)、その輸出産業の市況と競争関係が悪化し、輸出価額の低下が生じたこと、(二)、輸出に際してマルク手形の利用が進んだこと、とくにベルリン、ハンブルク宛のマルク手形の利用が一定の広がりを見せたこと、(三)、これが決定的な事であるが、ベルク・マルク銀行がブッパータルだけでなく、ラインウエストファールの諸産業との取引を拡大したことが、手形業務を重要なものとし、国内手形勘定の増大をもたらしたのである。

#### (4) 預金業務

ドイツの株式銀行が当初から預金の吸収には積極的ではなかったこと、それに対して、自己資本の比重が著しく高かったことはよく知られているところである。この点は、ラインウエストファールの地方銀行においても共通していることであった。これは創業当初の業務の重心とも関連していたのであった。しかしその後の銀行業の業態の基軸が、正規の交互計算業務などの領域に移されることによって、そのための業務の基盤として、預金業務の強化が必要となったのであるが、それがどのように進展したかがここでの問題である。七〇年代の設立恐慌の後も、他の諸銀行と同様に預金業務はあまり重視されては来なかった。とりわけ七〇年代の経済的沈滞のもとでは、銀行に流入する資金も、その有利な運用先を見出すことは容易で

表一(4) ベルクマルク銀行の預金の発展(1)

(千マルク)

年	各種預金 (他人資金)			B自己資金計 (株式資本・積立金)	$\frac{A}{B}$
	交互計算預金	貯蓄預金	総計 A		
1872	3,483	—	3,483	8,100	43,0 (%)
1876	6,266	1,384	7,650	8,200	93.3
1881	7,999	1,136	9,136	9,613	95.0
1884	11,320	3,457	14,778	11,804	125.2
1885	10,993	4,054	15,047	16,628	90.5

出所：Geschäfts-Bericht der Bergisch Märkischen Bank

はなかった。七七年の營業報告書が言うように、預金業務にとつては極めて都合の悪い状況が続いたこともあつて、かなり低迷していたことも事実である。預金に対する利子の支払いのために、手形業務や取り立て業務などの強化をはかり、収益源泉を拡大することが、重視されたりした。しかし八〇年代半ば以降になると、同行の預金業務の一定の前進が見られるようになる。交互計算預金 Kreditoren は、取引先企業の拡張と発展によつて増加して行くが、そのことに加えて、ベルク・マルク銀行が、預金の積極的吸収の目的で行つた、ライン川沿いやモーゼル地域の豊かな小都市での預金金庫 Depositenkasse の設置がこれに貢献したのであつた。ベルク・マルク銀行がこのように預金業務の積極的な拡大に取り組むようになったのは、取引先産業企業の側からの資金需要の増加と共に、銀行運用資本の基盤の拡大の必要に迫られることが多くなつたことを示している。

(5) 証券業務、委託売買、証券引き受け発行、共同参与業務

「設立ブーム」期にベルク・マルク銀行は、デイスコントゲゼルシャフトや、その子会社で地方業務を担当する銀行との関係を通じて、証券の売買、創業証券の発行業務も含めて証券業務に深くかかわつた。その結果、ブームの崩壊と設立恐慌での証券の相場下落によつて、大きな損失を被る事を余儀なくされた。そのため証券勘定での取引額は急減し、七六年にはピーク時の1/6にまで減少し、恐慌後の五年あまりにわたつて損失の計上を続けざるを得なかつた。特に大きな損失をもたらしたのは、デイスコントゲゼルシャフトの主導による二つの海外銀行—ドイツ・ラブラタ銀行とドイツ・ブラジル銀行—の創業に参加したことによつてもたらされた。このことは、その後のベルク・マルク銀行の活動を大きく規定し、先に述べたように証券業務からの後退、交互計算業務を基軸とする方向にむかわせることになつたのである。一八七八年までは保有証券の売却のため、証券勘定の残高は減少した。七九年からは、デイスコントゲゼルシャ



フトとの結び付きから、鉄道優先株の引き受け売出しに参加したり、自己の取引先企業の社債発行などにより、証券保有額をある程度増やしたが、八〇年代半ばまでは証券・発行業務はこの銀行にとっては二次的な位置にとどまるものであった。

ところが八五年以降、ベルク・マルク銀行の証券業務の拡大が現れるようになった。その背景と理由については、金融市場での全般的な資金過剰の状態が続いたことから、投資家・公衆が有利な投資先として、証券投資にたいして需要を向けるようになったことが指摘される。このような投資家層の動向の変化を、ベルク・マルク銀行は、自らが作り上げつつあった支店網を通じて把握したのである。これに対してこの銀行は、顧客・投資家層からの証券売買の委託業務の形態で、各地の支店を通じて証券の売買注文を集中したのであった。その結果、証券取引高は八〇年代後半からかなりのテンポで増加し、九〇年代初めに一時中断するが再び九〇年代の半ばにかけて増加の勢いを示す。

このような証券売買の取引顧客には、証券取引業に業務の中心をおいた個人銀行商会もふくまれているわけで、これに対して証券担保での貸付などの証券金融、投機信用の供与もまた重要な業務をなすものであった。ただし、バランスシートにある、「銀行業者への証券による貸付」は、支店の活動を通じた、ルポールやロンバードなどの証券取引―投機的取引を含む―に関わるものであると推測されるのである。

このような証券業務の展開にとつての前提には、次のような事情があった。つまり、ベルク・マルク銀行がベルリンの「国際銀行」―これは個人銀行の時代から、ベルリンで証券業務や裁定取引など専門的な活動を行って来たものである―の創業に参加して以来の関係を通じて、ベルリンでの証券の売り出しに、共同引き受けの形態で参加したり、参与の一部に加わることができたことなどでの取引関係が結ばれていたことである。また、ベルク・マルク銀行は、独自に自らの取引顧客の株式会社への組織変更や証券の引き受け発行においても、こうしたベルリンとの繋がりに依存して業

務を拡大したのである。しかしここに現れたところの証券業務の積極的拡張への動きは、むしろ同行の取引先の産業企業との交互計算信用取引の拡大・深化によって、その、証券発行による流動化の必要性が増大してきたことを示すものであった。ここにおいて、地域的な銀行である「国際銀行」を介した間接的・不安定な関係によるのではなく、ベルリン金融市場とのより強固な関係を構築することによって証券業務の積極的拡張をはかることが必要となったのである。こうして、ベルク・マルク銀行とベルリン大銀行との連携という新たな段階をむかえることとなった。

#### (五) ドイチェバンクとの連携・利益共同体の形成とその後の展開

かくして、ベルク・マルク銀行はベルリン大銀行と《利益共同体協定 Interessengemeinschaft》を締結しこれと連携する方向へと進んだ。一八九七年に結ばれたこの協定は、地方銀行とベルリン大銀行とのはじめての、本格的な連携であった。ベルリン大銀行としてのドイチェバンクにとっては、その業務の拡張を推進するにあたって、地方の産業企業の取引顧客と、長い間にわたって正則銀行業務を築いて来た有力な地方銀行を引き受け、これと連携を深めることによってその産業的な活動基盤を強化することにつながるものであったことは言うまでもない。

地方銀行の一方の雄としてのベルク・マルク銀行にとつては、この結合は、以下のような意義をもつものであった。《この結合は、我々の自立性を完全に守りつつ、しかも新たな支店の設置によることなく、我が銀行の本来の活動領域を首都ベルリンと連携し、ドイツ国内や外国との取引を容易にするものとなる。さらに、これまでの経験から分かるように、こうした連携がベルリンでの巨額の金融プロジェクトへの参加を確実なものとし、また、われわれの組織が、ドイツの首都や外国との結び付きをもったドイチェバンクと結合することによって、交互計算取引などの一層の拡大が確

実なものとなされるのである。<sup>(14)</sup>》

ベルク・マルク銀行にとり、その資金力が産業の資金需要の増大に対応しないという限界を克服すること、産業への貸し付けを証券発行によって流動化する必要性、取引先企業の株式会社への組織変更業務の拡張、さらには国内はもとより外国との取引の容易化を図るためには、ベルリン金融市場を基盤とする大銀行との連携によって、その活動の限界を克服することが目指されたのであった。そしてこの協定の実施のために、一〇〇〇万マルクの増資の提案がなされ、ドイチュエバンクとの株式交換（五対四の交換比率）によって、新株の大部分はドイチュエバンクに引き受けられることになった。これは、ドイチュエバンクによる永続的参与を意味し、それに基づいて、ドイチュエバンクはベルク・マルク銀行の監査役会に二人のメンバーを送り込んだ。

地方銀行としてのベルク・マルク銀行はこれによって新たにベルリン大銀行のグループの一員としての発展の段階を迎える。そこで次に、この銀行の新たな活動の発展がどのようにに進んだかを見ることにしよう

(1)、まづ最初に分かることは、九七年のドイチュエバンクとの連携の後、総体としての業務の規模の拡大の著しいことであらう。バランスシートの規模でみてその後の一〇年間でほぼ三・五倍に拡大していることである。特に、交互計算取引の増加は最も著しかった。これは取引規模や取引高の増大に現れているだけでなく、従来とは根本的に新たな発展の条件のもとで、つまり取引先顧客の信用需要の増大に対して、交互計算貸し付けなどによる信用授与が、今度はベルリン金融市場での証券発行による流動化の可能性に対するはつきりとした見通しのもとで行われるようになったのである。そのため、交互計算貸し付けにおいても、従来とは異なつて、積極的な展開が可能になったためである。それとともに、顧客の構成の点でも、ライン・ウエストフールンの大工業、とりわけ、製鉄・精錬業、機械工業、鉱山業やカリ工業、褐炭鉱業などの重工業の領域にも拡大していることである。これは、監査役会メンバーの属する産業分野の構

表一(5) ドイチェバンクとの連携以降のベルクマルク銀行の発展

(1,000マルク)

	現金・ ライオン 預金	手形 (うち 外貨)	交互計 算貸付	対銀行 家貸付	証券保有	株式資本	準備金	交互計 算預金	一般預金	引受	バラン スシ ェト 総額
1897	2,896	25,249 (2,777)	43,679	34,115	6,800	40,000	8,676	25,741	16,068	18,456	117,318
1900	3,163	31,775 (3,175)	84,141	55,009	12,149	50,000	12,405	45,406	37,645	36,470	196,826
1901	3,730	32,689 (3,799)	85,313	58,245	13,674	50,000	12,601	53,411	39,770	34,016	205,631
1903	4,670	38,494 (6,409)	89,563	61,939	18,852	54,250	13,416	61,253	51,950	30,715	229,444
1905	4,852	34,867 (3,306)	123,324	69,071	20,327	60,000	14,622	75,113	60,314	40,737	273,439
1907	9,473	48,434 (2,111)	157,672	76,263	15,790	75,000	22,529	88,816	81,026	51,923	345,541
1911	8,083	65,010 (5,561)	177,340	93,671	27,466	80,000	24,235	129,777	93,388	46,449	383,639

出所：Geschäft-Bericht der Bergisch Märkischen Bank

表一(6) ベルクマルク銀行の預金の発展(2)

(千マルク)

年	各種預金 (他人資金)			A	A
	交互計算預金	貯蓄預金	総計 A	自己資本 (株式資本・積立金)	負債・資本合計
1889	13,887	5,607	19,494	87.8 (%)	34.7 (%)
1894	22,295	7,222	29,517	129.3	44.0
1896	23,669	11,878	35,547	97.8	39.0
1897	25,741	16,068	41,810	84.2	35.6
1901	53,411	39,770	93,182	141.2	45.3
1905	75,113	60,314	135,427	181.4	49.5
1907	88,816	81,026	169,842	174.1	49.1
1911	129,777	93,388	223,165	210.2	64.5

出所：Geschäfts-Bericht der Bergisch Märkischen Bank

表一(7) ベルクマルク銀行の引受勘定

年	引受(A)	交互計算貸付(B)	A / B	負債・資本合計(C)	A / C
1887	15,126	31,909	47.4 (%)	49,997	30.2 (%)
1890	10,236	25,181	40.6	58,300	17.5
1893	11,653	25,060	46.5	60,137	19.3
1895	11,778	32,988	35.7	79,449	14.8
1897	18,456	43,679	42.2	117,318	15.7
1899	31,919	70,529	45.2	170,912	18.6
1900	36,470	85,313	42.7	196,826	18.5
1903	30,715	89,563	34.2	229,444	13.3
1905	40,737	123,324	33.0	273,439	14.8
1907	51,923	157,672	32.9	345,541	15.0
1911	46,449	177,340	26.2	383,639	15.0

出所：Geschäfts-Bericht der Bergisch Märkischen Bank

成や、監査役の役員兼任の状況から窺うことができる。<sup>(15)</sup>

(2)、預金の増加も著しいものがあつた。これは、取引顧客の構成が変化して来たことの影響もあつて、交互計算取引での預金 Kreditoren の増加が進んだことのほかに、ドイチェバンクとの連携の後にさらに積極化した支店の設置や、預金取り扱い所の設立によつて預金の吸収、とりわけ貯蓄性預金 Depositen の吸収が進んだのであつた。このような預金業務の拡張が、同行の交互計算業務を基軸とした展開を支えるものであつたことは言うまでもないが、その結果、銀行の運用資本総計（負債・自己資本）にたいする比率においても顕著な前進が達成されたのである。しかし、これによつて、同行が預金銀行化の傾向を強めたということはできないであろう。預金拡大を規定したものは、交互計算信用の拡大のための資金的基礎の強化にあつたからである。

(3)、引受信用は、全体としての銀行の信用授与の中での比率において低下の動きが見られるようになった。これは銀行の側でこの形態での信用供与を制限する努力が行われたこと、さらに、顧客の構成の変化つまり重工業の顧客の比率の増大によつて、従来よりも引き受け信用の利用が減り、代わつて取引先企業の社債発行が増加したことなどがその理由とされる。実際、九三年には引き受け信用の利用を商事会社

とランブル業務の目的に限定しようと試みた。しかし、にも拘らず一九〇八年の「營業報告書」はあらためて、引き受け信用を輸入貿易金融のランブル業務に利用されるべきものであつて、純粹の信用請求の手段として利用することを制限すべきだと述べていることから窺えるように、当座貸付にたいする引き受けの割合からも明らかのように、この信用形態は、九〇年代における状況よりは低下したものの、その重要性を依然として保持しつつつづけたのである。

(4)、手形について、一九〇八年の「營業報告書」は、同行が手形保有額の増加に努めてきたことについて述べているが、とりわけ、「第一級手形 Prima Diskonten」の部分を増加させることによって、手形ポートフォリオの一層の強化を図つたとしている。このことから分かるように、交互計算貸付や証券業務の拡張を進めると共に、同行がその流動性のための準備として優良手形の確保を重視したことが見て取れる。当然、ベルリンの手形割引市場との結び付きの中で理解されることである。また手形取引の件数も、九七年の四二四七六件から一九一一年には八三三〇一件へと増加し、しかも、手形の平均額面の上昇傾向が窺えるが、このことは取引顧客層の変化と共に、上述の観点から流動的投資の確保という配慮によるものでもあつた。

(5)、証券業務については、ドイチェバンクとの連携の後、ベルク・マルク銀行の証券業務の重要性は飛躍的に高まることとなった。その点は第一に、ドイチェバンクの主導する大規模な金融取引に、いまやコンツェルンのメンバーとして参加が確実に保証されるようになったことである。表一(8)によればベルク・マルク銀行の大きな証券引き受け発行への参加の状況が示されているが、国債、地方債、自治体債券、鉄道や市街電鉄会社などの債券発行への参加件数はほぼ安定的であり、各種の株式や社債の発行への参加件数が急速に増加していることが見て取れる。特に、一九〇〇年以降ドイチェバンクに主導された鉱山、石炭鉱業、製鉄・製鋼業などの重工業の大企業の証券発行に恒常的に参加するようになった。(例えば、一九〇〇年、ボーフム粗鋼会社の株式発行、〇二年の鉱山会社の社債発行、一般ブルメンタール鉱業

会社やハルペン鉱業会社社債発行、〇三年のヒベルニア炭鉱会社の社債発行、〇四年、ドイツルクセンブルク会社の新株発行への参加などがそれである。この結果、同行の保有証券及び証券の共同引き受け・参与の内容構成も重工業の諸会社の各種証券の比率が増加の傾向を示した。

第二に、ベルク・マルク銀行が永年、取引関係を築いてきた企業の証券発行（組織変更、増資や社債の発行など）の可能性が飛躍的に拡大したことであり、同行の業務の展開に、極めて大きな影響をもたらすこととなった。ここにおいて、ドイチェバンクにたいして親銀行の主導による発行業務の機会を提供し、ベルク・マルク銀行がメンバーとして参加するという方法のほかに、ベルク・マルク銀行自身のイニシアチブに基づいて証券発行が行われる可能性が拡大したことである（表一（8））。見られるとおり、ベルク・マルク銀行の多様な顧客構成を反映して、繊維産業にとどまらず電力・ガス、金属、セメント、醸造業と広がりを見せているが、これらはいずれもベル

表一（8）ベルク・マルク銀行の証券売出

年	国債・地方債 ・輸送会社	不動産業	銀行・水道・ ガス・電力企業	民間株式及び社債
1898	9	2	12	13
1899	9	3	12	15
1900	12	3	12	19
1901	10	3	12	20
1902	6	4	14	19
1903	11	5	12	18
1904	8	5	12	23
1905	8	6	8	26
1906	14	6	9	36
1907	10	6	7	42
1908	10	6	5	37
1909	12	6	3	30
1910	13	6	2	30
1911	9	5	5	32

数字は、ベルクマルク銀行が参加して行った証券売出の件数（分野別）を示す。

出所：Geschäftsbericht, 1912, Klinker, a. a. O, S. 47.

ク・マルク銀行との交互計算取引の関係を基礎としていたのであり、当然、銀行は、これらの諸企業に対してそれに先立って、相当規模の信用供与を行ってきたという状況にあった。そのうえで、この銀行のイニシアチブで証券発行により流動化が試みられた。こうしたことは、従来、極めて限られた可能性しか開かれていなかったのである。

さらにベルク・マルク銀行の積極的なイニシアチブが発揮された領域としては、褐炭鉱業とカリ鉱業があった。カリ鉱業との関係は、ラインの鉱山業との取引の中から生じて来たものであり、ここでの創業や資金調達において、エッセン信用銀行の協力で、ベルク・マルク銀行の主導性のもとで、活動が展開されてきた分野であった。また、褐炭鉱業とベルク・マルク銀行との関係は古く、この産業が当初の段階で、個人企業の形態で経営されていたところからのつながりであった。この産業のその後の発展・拡大の過程を通じて、終始その資金的な要請に応えることで関係を維持してきた。さらには、株式会社への組織変更の際や、その後の社債発行での資金調達においては、同行のイニシアチブのもとで行われたのであった。このようにドイチェバンクとの連繋ののち、新たな段階において、今やベルク・マルク銀行は、大銀行グループの一メンバーとして、自らの交互計算顧客の証券発行を独自に引き受け遂行するという可能性を現実のものとする事となったのである。<sup>16)</sup>

## Ⅵ 小括

以上のことから明らかにになったことをまとめておこう。ライン・ウエストフアーレンの地方銀行としてのベルク・マルク銀行の展開において、特徴的であったことは次のことである。まず、この銀行は、当初から一貫して、産業の取引顧客との交互計算取引を発展させることを主要な目的としてきたこと、そのために、優良顧客との取引関係を確保する





- (5) M. Pohl, Konzentration im Deutschen Bankwesen, F. Knapp 1982, S. 120~124
- (6) 巴圖因敏・維繫輔° 鐵||神鐵||鐵
- (7) P. Wallich, Die Konzentration im Deutschen Bankwesen 1905, S. 49~81
- (8) F. W. Klinker, Studien zur Entwicklung und Typenbildung von vier Rheinisch-Westfälischen Provinzialbanken, 1913. A. Weber, Die rheinisch-westfälischen Provinzial-banken und die Krisis, (Schriften für Socialpolitik, 110, Die Störungen im deutschen Wirtschaftsleben während der Jahre 1900 ff. 1903.)
- (9) Denkschrift aus Anlass des 25 jährigen Bestehens der Bergisch Märkischen Bank in Elberfeld, 8. Dec, 1896, Geschäft-Bericht der Bergisch Märkischen Bank, F.W. Klinker, a.a.O. Kapitel I. Bergisch-Märkische Bank, und Kapitel 5. 參照した°
- (10) Statuten der Bergisch-Märkischen Bank in Elberfeld, 1871, Erster u. Zweiter Teil.
- (11) Klinker, a.a.O. S. 29
- (12) Geschäft-Bericht der Bergisch Märkischen Bank, 1893
- (13) Klinker, a.a.O. S. 186
- (14) Geschäft-Bericht der Bergisch Märkischen Bank, 1897, S. 3
- (15) Klinker, a.a.O. S. 33~34
- (16) Klinker, a.a.O. Kapitel 5.